

保険でよい歯科診療を
大阪連絡会

縄文人に学んだ食育を

国立科学博物館名誉研究員の馬場悠男氏が講演

人類の進化と顎の退化について語る馬場氏
6月8日、M&Dホールで開催した。馬場悠男氏(国立科学博物館名誉研究員)

人類進化の過程における咀嚼器官の変化について学ぼうと、「保険でよい歯科医療を」大阪連絡会8日、市民講座「歴史ミステリー人類は噛んで進化した」骨から探る人類史」をM&Dホールで開催した。馬場悠男氏(国立科学博物館名誉研究員)が講師を務め、ウェーブ視聴も含めて173人が参加した。

馬場氏は、「現代日本人は顎が弱く、歯列が狭くて歯槽部に対して歯が大きい歯並びが悪いのが特徴だが、縄文人は顎が丈夫で歯並びがよく、臼歯が奥歯で正常に咀嚼していた縄文人の顎を取り戻そう」と強調し、生野菜や干物の素揚げ、すね肉など硬い赤みの肉、ヨーロッパのパンなどを食事の例に挙げた。

馬場氏は、人類進化の過程で直立姿勢が発達し、道具や火を使用するようになると顎顔面が退縮し喉頭が下降したことを説明した。これは、咀嚼の障害だけでなく睡眠時無呼吸を引き起こす究極要因となった。また、弥生時代以降の豊かな潤気候による稲作農業や箸文化によって、更なる顎顔面の虚弱化を招いた。このような時代的・文化的な変化について馬場氏は「日本人の食文化を変えることで、顎顔面を強化できる。手づかみで大きく硬い食物を前歯で食いちぎる奥歯で正常に咀嚼していた縄文人の顎を取り戻そう」と強調し、生野菜や干物の素揚げ、すね肉など硬い赤みの肉、ヨーロッパのパンなどを食事の例に挙げた。

馬場氏は、「娘と話を聞いた。本人が意識してくれないなどと思う」「顎の退化について歯科医師の立場から危機感を発信していきたい」など、多くの感想が寄せられた。

6月5日国会要請行動

保険でよい歯科署名 提出

協会は5日、戸井逸美副理事長、平野権栄、李容顯各理事らで国会議員への要請行動に取り組んだ。面談には森山浩行衆

参加レポート

院議員(立憲)、大門実紀史参院議員(共産)、山下芳生参院議員(共産)、八幡愛衆院議員(れいわ)が応じたほか、尾辻かな子衆院議員(立憲)、大橋裕子参院議員(社民)の各秘書が対応した。各氏とも協会から持参した7223筆の「保険でよい歯科医療の実現を求める」署名の紹介議員を引き受けた。参加した李理事の感想を掲載する。

私が面談できたのは、八幡議員(写真上)と森山議員(写真下)。物価



第3回理事會報告

政策パンフの活用を

総枠拡大、窓口負担の軽減求めています。

協会は14日、第3回理事會を開き、参院選に向けた政策パンフレットの活用、歯科衛生士の浸潤麻酔行為などについて協議した。

協会が作成した政策パンフ「歯科医療に正当な評価を」について意見交換をした。歯科医療費の総枠拡大や窓口負担の軽減を実現するため各院所で政策パンフを活用し患



財務省の医療制度改革論を問う

芝田英昭 元立命館大学教授・元立教大学教員

財務省財政制度等審議会が政府の経済財政運営と改革の議論の中で社会保障制度に言及している。「効率化」の名の下に医療者と患者、世代間を分断し、公的医療保険制度の変質を狙う内容だ。社会保障・社会福祉政策に詳しい立教、立命館大学の元教授である芝田英昭氏にこの問題について寄稿してもらった(全4回連載)。

財務省財政制度等審議会が政府の経済財政運営と改革の議論の中で社会保障制度に言及している。「効率化」の名の下に医療者と患者、世代間を分断し、公的医療保険制度の変質を狙う内容だ。社会保障・社会福祉政策に詳しい立教、立命館大学の元教授である芝田英昭氏にこの問題について寄稿してもらった(全4回連載)。

財務省財政制度等審議会が政府の経済財政運営と改革の議論の中で社会保障制度に言及している。「効率化」の名の下に医療者と患者、世代間を分断し、公的医療保険制度の変質を狙う内容だ。社会保障・社会福祉政策に詳しい立教、立命館大学の元教授である芝田英昭氏にこの問題について寄稿してもらった(全4回連載)。

財務省財政制度等審議会が政府の経済財政運営と改革の議論の中で社会保障制度に言及している。「効率化」の名の下に医療者と患者、世代間を分断し、公的医療保険制度の変質を狙う内容だ。社会保障・社会福祉政策に詳しい立教、立命館大学の元教授である芝田英昭氏にこの問題について寄稿してもらった(全4回連載)。

財務省財政制度等審議会が政府の経済財政運営と改革の議論の中で社会保障制度に言及している。「効率化」の名の下に医療者と患者、世代間を分断し、公的医療保険制度の変質を狙う内容だ。社会保障・社会福祉政策に詳しい立教、立命館大学の元教授である芝田英昭氏にこの問題について寄稿してもらった(全4回連載)。

財務省財政制度等審議会が政府の経済財政運営と改革の議論の中で社会保障制度に言及している。「効率化」の名の下に医療者と患者、世代間を分断し、公的医療保険制度の変質を狙う内容だ。社会保障・社会福祉政策に詳しい立教、立命館大学の元教授である芝田英昭氏にこの問題について寄稿してもらった(全4回連載)。

財務省財政制度等審議会が政府の経済財政運営と改革の議論の中で社会保障制度に言及している。「効率化」の名の下に医療者と患者、世代間を分断し、公的医療保険制度の変質を狙う内容だ。社会保障・社会福祉政策に詳しい立教、立命館大学の元教授である芝田英昭氏にこの問題について寄稿してもらった(全4回連載)。

財務省財政制度等審議会が政府の経済財政運営と改革の議論の中で社会保障制度に言及している。「効率化」の名の下に医療者と患者、世代間を分断し、公的医療保険制度の変質を狙う内容だ。社会保障・社会福祉政策に詳しい立教、立命館大学の元教授である芝田英昭氏にこの問題について寄稿してもらった(全4回連載)。

財務省の「社会保障の理解」は正しいのか？

財務省財政制度等審議会が政府の経済財政運営と改革の議論の中で社会保障制度に言及している。「効率化」の名の下に医療者と患者、世代間を分断し、公的医療保険制度の変質を狙う内容だ。社会保障・社会福祉政策に詳しい立教、立命館大学の元教授である芝田英昭氏にこの問題について寄稿してもらった(全4回連載)。

助・共助・公助の三層構造で捉えていると理解され、その限りのにおいて社会保障を「共助」と位置付けている。その後の政府文書でも同様の概念が使用されてきた。このことから、今日まで政府が社会保障の基本理念に「自助・共助・公助」を位置づけたとは考えられないのに、あえて同文書で主語をすり替えてまで基本理念の変更を望むのか。医療保険等の社会保障に「自助・共助・公助」を位置づけ、自助を「自己負担(法的には「一部負担」)、共助を「保険料」、公助を「公費負担」とすることで、「一部負担」と「保険料」を拡大し、公費負担を極限まで削減する「口実」に使用したいのではなからうか。また、同文書では「大きなリスクは共助中心、小さなリスクは自助中心の原則」(同p21)を徹底すべきとしているが、何をもち「大きなリスク」「小さなリスク」なのかは判然とせず政府による恣意的運用を許す可能性があり、結果として「社会保険としての医療保険」を自助中心の商品としての「私保険」に変容させる可能性がある。人権原理、公的責任の下で運営されるがゆえにあえて保険に「社会」を冠していることの意義を捨象する流れであり、看過できない。